

して泣き、私の五体にしがみついて離れなかった。

亡母の従兄弟の世話で縁あって塩釜に定着し、体を休めるいとまもなく、進駐軍労務者、水産加工屋の工夫、安定所の工夫等、なりふりかまわず食のために働いた。

弟妹たちは年齢的に中途半端で、稼ぎにもならず、淋しい夜など、こんなときに父が健在でいてくれたらなあとつくづく思った。

在台二十五年、営々として築いた地位も、名誉も財産も、何一つ残ることなく、戦争の犠牲となって消え失せた。

二人の子に支えられ

愛知県 熊井光子

昭和十七年七月、夫は嘉義より生後半年と三歳の子を置いて台南の部隊に出征しました。台湾生まれの私たち夫婦は、なんの苦勞も知らず暮らしていました。ある日警察から呼び出されました。行ってみると、京城の部隊

にいる軍医の兄の所へ出した封書を出し、「貴女が出した手紙ですね。」と言われ、始末書を書かされました。部隊に出した手紙まで開封されるとは、ただただびっくりしました。手紙の内容は、夫が戦地に出発するらしい、と高雄に住む夫の両親から、知らせがあり、私は二人の子を連れて行き、そのときにあった空襲のおそろしさを書いた手紙でした。夫は検察庁に勤務の身でしたので、なんともいやな思いをしました。嘉義駅からの軍用列車にB29から爆弾が落とされ、市内は次から次へと爆発する爆音で恐怖におののいてしまいました。子どもの手を引いて、裏庭に掘った小さな防空壕にもぐりこみました。市内を煙でおおうため、一軒から煙を二か所出すよう通達がきました。苦勞して青葉のついた枝を取り、煙を出しました。不安な毎日のなか、敗戦の知らせがありました。台湾人の子どもが、私の家の中に砂を投げこみ笑って出て行くこともありました。

二十一年三月、三千円持ち近くの公学校に集結するよう、通達がきましたので、あわてて作った手製のリュックを二人の子どもにもしよわせ、家財も何もかも残して

官舎を出て行きました。夜は持参した一枚のごさに、三人ひっついて寝ました。一週間ほどして嘉義駅に集まり、夜になって灯りのない汽車に長い時間乗り、基隆港に着きました。岸壁で十日ほど待ったでしょうか、やっと乗船できました。栄養失調のせいか、子どもの足はむくんで、見る目にも痛々しく、思わず涙が出ました。日本の憲兵がきて私の結婚指輪を見て、「はずしなさい」と言っ、見ている前で海に捨ててしまいました。他の集団の中には、両手の指にいっぱいはめている人がいましたのにとても残念でした。最後の汽車から降り、一時間ほど歩けば母が一人住む実家に帰れるのだと、二人の子の手をしっかりと持って、通りがかりの人に聞いては実家へと歩きました。始めて見るチラチラ降る雪さえも何か励ましてくれるように、暖かささえ感じる思いでした。母と涙の対面をし、長い旅の疲れでただただ眠る毎日でした。

二十一年、七月、松本の陸軍病院から夫の葉書がきました。下の男の子は生後半年で別れているのに夫を見て「とうちゃん」と言葉をかけたのには、思わず目頭が熱く

なりました。夫はチモール島からジャワ島に行き、病院船で帰還したとのことでした。

その後は、生活のため知人からトマトを分けてもらい、上田駅前売りに行き道に並べたとこ男の人がきて、誰の許可で売っているのかと派出所へ連れて行かれ、また始末書を書かされました。今度は夫の実家の長野の田舎へ引っ越し、親戚からリングを分けてもらい、押しつぶされそうな思いをして汽車に乗り、東京へ行商に行く毎日でした。

二十二年二月、長野の裁判所に復職することになり、喜んだのもつかの間、夫は栄養失調のため体調をくずし、肺結核となり、右肋骨六本を切除し、三年ほど静養しました。その後は心配しながらもどうか六十三歳の定年をすませました。平和な今は、お互いの身をいたわりながら、一日一日を大切に感謝の気持ちで過ごしております。